国立公園指定と自然破壊

羽賀克己

≪国立公園に指定されたため、せっかくの自然が破壊された≫とは、よく聞かされる言葉である。はなはだ残念なことではあるが、われわれ国立公園の管理に携わる者としても、その事実は認めざるを得ない。もちろん、国立公園指定が自然破壊の直接原因であるはずは絶対にないが、因果関係の一環をなしていることは否定できない。それは、ここ知床国立公園においても決して例外ではない。

知床半島が国立公園に指定されたのは、昭和三十九年六月であった。指定の要因は、火山地形や断崖美もさることながら、半島を覆う原生林とともに、山稜をいろどる高山植物群落も見落とされてはいなかったであろう。

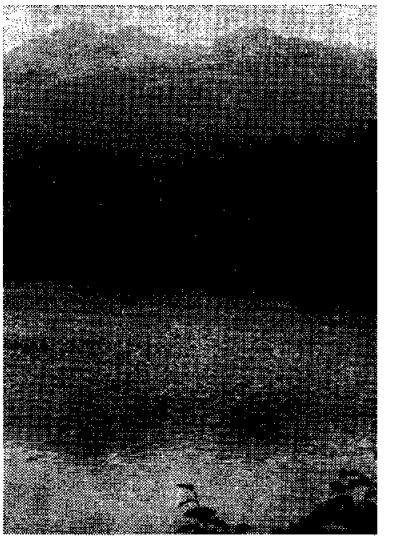
昭和四十一年夏であったと思う。そのころ瀬戸内海国立公園の勤務をしていた私の許に、学生時代の山仲間から便りが届いた。それは知床の山行をつづったもので、「羅臼岳に登り、清浄無垢な植物群落に感激した」としたためてあった。飯豊連峰・八幡平・秋田駒ケ岳等々、高山植物の豊富な山々をともに歩いた彼が、いたく感激した知床の高山植物とは、どんなに素晴らしいのだろうか。私は、想像し、憧れ、夢想しつづけた。

それから二年後の昭和四十三年七月に知床国立公園へ転任して来た私は、関係機関への挨拶廻りを済ますと、さっそく羅臼岳へ出かけた。しかるに、私が目を見張ったものはなんであったろうか。おびただしい塵芥の集積であり、打ち壊された指導標の残骸であった。踏み荒された植物群落であり、見さかいもない焚火の跡であった。僅か二年の間に、このような荒廃をもたらした原因はなんであろうか。そう考えると、好むと好まざるとにかかわらず、≪国立公園の指定→利用者の増加→自然の破壊≫という、一連の因果関係に還らざるを得なくなる。

私が羅臼岳へ登ったとき、お花畑で食事をしている二人連れの若者があった。彼らが弁当殻や空缶を植物群落の中へ捨てたので「オイ、やめろよ！」と声をかけたら、なんのことか判らない様子でポカンとしていた。「山はごみ捨て場じゃないんだから拾って帰れよ！」といわれて、はじめてそんなもんかなというように、しぶしぶ拾い集めるのであった。

また、関係地方当局者や業者にしても、なにはさておき「客集めや施設整備だ」という傾向が顕著である。すなわち彼らにとって国立公園の指定とは一流のカンコー地という看板を貰ったことのみを意味し、それに随伴する「自然保護の使命を与えられたのだ」という自覚はほとんどない。その結果、観光客誘致や施設整備費の獲得には血眼になりながら、施設周囲の清掃さえ満足にやらないという現象が起きてくる。

このような例は知床に限らず、他の国立公園でも広く共通することであろう。



硫黄山（知床五湖）

ところで、国立公園の指定によって自然が破壊されることは不可避なことなのだろうか。先に述べた一連の因果関係を断ち切り、国立公園の自然を保護することは不可能だろうか。それは、決して不可避でも不可能でもない。要は、前に例示したような問題を解消させることである。利用者のマナーをたださせ、関係者の意識と理解を向上させて協力体制を確立することである。そのためにはどうすればよいだろうか。

各方面でしばしばいわれていることではあるが、≪国立公園指定→自然破壊≫の因果関係を断ち切り、問題を解消させるハサミは、「国立公園の管理体系を強化すること」である。数多くの人員でパトロールを強化し、利用者や事業執行者を指導監督するとともに、関係者に呼びかけて広範な協力体制を確立するならば「自然の保護と利用」という、自然公園法の目的を達成することも、さして困難なことではないであろう。他産業との競合が比較的少なく、土地所有関係も良好なこの知床国立公園の場合は、他の国立公園に増して効果が期待される。

しかし、通常の事務費も満足になく、有形無形の援助を他に仰がなければ執務できない現状では、その指導性もおのずから限度がある。

（知床国立公園管理員）